



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1984 精道教育促進協会 (〒芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

希望への道

「出発しよう。」
父のところに帰ろう。」

希望なしには生きられない

皆さんはこの「カトリック大会」の標語に「希望」という言葉をお選びになつています。すっかり希望を失ってしまった人が年齢に関係なく大勢おられることは、経験によってご存知のとおりです。しかし、長い目で見れば、希望を持たずに生きていくことなどできません。それならば、一体どのようにすれば希望をふたたび見つけることができるでしょうか。どうすれば、人々に希望への道を教えてあげることができのでしょうか。

福音書の例え話に、一人の若者が登場します。若者は自信満々で父親のもとを去り、もつと自由で、もつと幸せになろうと、遠くに旅立ちました。ところが、財産を使い果たし、かつて一度も味わったことのない、奴隷に等しい冷遇を受けたとたんに、希望は消え失せてしまいました。そして、ついに自己の非を認めて父親を想い、父の家へ向かって歩きはじめます。(ルカ15・11〜20参照)「望みのないときにもなお望みをかけて信じながら。」

福音書には次のように書いてあります。「出

発しよう。父のところに帰ろう。」(同15・18参照) この意味深長なたとえ話は、人間の永遠のドラマ、すなわち自由のドラマ、自由濫用のドラマを見事に要約しています。

創造主は人間に自由という賜をお与えになりました。この自由のおかげで、人間は社会を形成し、かつ秩序づけ、またこの国と全世界で、精神の働きによってすばらしい産物を生みだしています。科学と芸術、商業と技術など一言で言えば、文明全体を創造することができますのです。人間にふさわしい仕方です。愛することができるのも自由のおかげです。人間にとって、愛とは、本能的に引きつけられるだけでなく、心が自由に決めることであるからです。自由であればこそ、神を愛し、礼拝する、つまり、人間の尊厳を如実にあらわすことができるのです。

しかし、自由には代償を払わねばなりません。自由な人は自問しなければならぬ、私たちは自由を行使するにあたり、自分の尊厳を維持できただろうか、と。自由とは放縦の

ことではありません。できることなら何でも、したいことなら何でもしていいというわけではないのです。制限なしの自由などあり得ません。人は自己に対し、同僚たる全人類に対し、また全世界に対し、そして神に対して責任があります。責任感、法、良心を軽くみる社会は、たとえどんな社会であろうと、人間生活の基盤そのものを掘りくずしてしまいます。責任に無頓着な生活を送っていると、無謀な生活に身をまかせ、あの放蕩息子のような奴隷状態におちいり、自分を迎える家も自由も失ってしまいます。自分の利益のみを考

えるなら、隣人を自分の利益のための道具にしたり、物的富を飽くことなく追い求めるようになるでしょう。もろもろの普遍的な価値が尊重されなくなると、結婚や家庭は崩壊をきたし、他人の生命、とりわけ胎児、老人、病人の生命が軽視されるようになります。神礼拝は姿を消し、かわって富、名声、権力崇拜が顔を出してきます。

およそ人類の歴史は自由濫用の歴史と云ってよいのではないのでしょうか。私たちの多くは、あの放蕩息子の轍を踏んでいるのではないのでしょうか。人生につかれ、愛は裏切られ、自分で自分を苦しめ、恐れと絶望に直面しなければならなくなるのです。「すべての人は罪を犯して神の光栄を奪い去られた。」(ローマ3・23) そして自問せねばならなくなりま

罪の個人面と社会面

た。たとえ話に登場する放蕩息子は、自由を濫用する人間を象徴しています。たとえ話は、自由を濫用した結果、つまり、罪の結果は何であるかを見事に示してくれています。それらによると罪の結果は、個人の良心に重々しくのしかかるだけでなく、まわりの人々の生命や生活環境、ひいては国家全体、人類全体

を苦しめるものとなります。罪を犯すことは人間として墮落することです。(第二バチカン公会議『現代世界憲章』13参照) 罪とは、人間の真の尊厳に敵対すると同時に、社会生活にも害を及ぼすものなのです。罪自体に個人的な面と社会的な面とがあります。罪を犯すと、これら二つの面で同時に、善が見えなくなり、希望の光を失ってしまうのです。

しかしながら、キリストはこのたとえ話で、私たちが外の暗闇におきざりにしたり、どん底まで落ちた罪人のみじめさを味わうがままにしてはかれませぬ。「出発しよう。父のところに帰ろう」という言葉を読むと、放蕩息子の心中に、なお善を求める心、消え得ない希望の光が残っていたことがわかります。この言葉を口にするだけで、若者の道行に希望への展望が開けてきました。このような展望は、つねに私たちの前にも広がっています。人間は、個人としてだけでなく、人類としても、立ち返って、御父のもとへもどることができるのですから。これこそ、福音の根本をなす真理であり、中心と言うべきメッセージです。

「出発しよう。父のところに帰ろう。」この言葉が放蕩息子の口から出たということは、心中に変化が起きたという明らかな証拠です。というのも、続いて次のような言葉が聞かれるからです。「お父さん、私は天に背きそしてあなたに背いて罪を犯しました」と言おうと。(ルカ15・18参照) この福音の中心に、改心、痛悔とは何か、を見ることができます。

真理を渴望して

それはなぜでしょう。そのわけは、たとえ話が人間の心の奥にかくれているものを明かしているからです。たとえ罪を犯していても、さらには罪を通してすら、人間の心の奥には活発に動いているものがあるのです。すなわち、飽くことなく真理と愛を求め続ける心で

す。これは、人の心の、被造物をはるかに越えて神に至らんとする傾きを如実に証明しています。人間にとってこの心の傾きこそ、改心への第一歩なのです。

そして、それは同時に、神に向かう道の出発点でもあります。このたとえ話には、神の側での出発点については、きわめて簡単に、しかし強く心に訴え、説得力ある言葉で描かれています。父親は待っていたのです。息子が帰ってくるのを確信して、息子を待っています。父親は息子が帰りに通るはずの道に出て待っているのです。息子を迎えてやりたい一心で。

この慈しみをみると、世の創造以前から御子において人間を愛して下さっている神の愛がよくわかります。(エフエズ1・4・5参照) 神の心に永遠の昔から宿るこの愛は、私たちの時代に、キリストを通して示されました。この啓示の頂点がキリストの十字架と復活であります。

ですから、キリストの十字架を希望の象徴として礼拝するのはまことに適切なことでした。(…) 神への立ち返りを望み、改心を準備する人々を、神ご自身が迎えてくださるといふことの象徴、これが十字架のしるしです。この象徴、十字架のしるしにおいて、父と子と聖霊の愛が人類の上に下ったからです。しかも、この愛は尽きることのない愛なのです。神に立ち返るとは、この神の愛に出会い、その愛を心に受けることで、そうすることはすなわち、愛を基として、将来の生き方を律することになります。

「出発しよう。父のところへ帰ろう」ともらしたとき、放蕩息子の中には、まさにこのことが起こりました。しかし同時に、父の家に戻るには、「お父さん、私は罪を犯しました」(ルカ15・8)と告白せねばならない、つまり、自らの非を認める必要があると、あの若者は悟ったのです。悔悛(痛悔)は和解を意味しま

すが、和解を得るには前もって自己の罪を告白しなければなりません。罪を告白するとは、神は私の父である、しかもゆるしを与える父である、と認めることであります。罪を告白してこの真理を証言する人なら、御父が子として受け入れてくださいます。放蕩息子は、父としての神愛によってしか罪は赦されないとを知っていたのです。(…)

みなさん、この放蕩息子のたとえ話をじっくりと黙想してください。この話はもの見事に現実を写しだしています。それによると、希望への展望は、父の元へ立ち返る道と密接に結びついています。この立ち返りが具体的に何を意味するかをよく考えてください。ここで言う立ち返りとは、良心の糾明、自己を刷新するという確固たる決意をともなった痛悔、告白、償いのことです。この秘跡を敬う心を新たにしてください。私は「ゆるしの秘跡」について話しています。ところで、告解の秘跡は、愛の秘跡、つまりご聖体の秘跡と深い関係をもっています。告解は私たちを悪より解放し、ご聖体は最高の善との交わりに導いてくれるのです。

毎日曜日のごミサには必ずあずかれ、と教会は熱心に招いていますが、この招きをまじめに受けとってください。会衆の真中においてなる御父と出会い、愛の贈り物たるご聖体、希望のパンを拝領するのはほかならぬごミサにおいてなのです。日曜日を本当の意味で主に献げられた日にしてください。私たちの生命は主のものであり、私たちには主を礼拝する義務があるからです。こうしてくだされば、神と私たちとの一致(交わり)は日々の生活の中でつねに生き生きとした活力を保ち、行ないすべてでキリストを証しするところができるようになるでしょう。

以上申し上げましたことすべてが、「出発しよう。父のところへ帰ろう」という言葉に含まれています。(一九八三・九・十一)

第二バチカン公会議は教会一致運動に弾みを与えましたが、この運動について思いを巡らせると、視線は自然に、「一致の母」「離れた神の子らの母」であるマリアに向かいます。

旧約聖書に出てくる「離れた神の子ら」とは、異国、とくにバビロニアに流された人々を指しています。人々が異邦人の間に離散するのを主はおゆるしにされたわけですが、それはイスラエルの民が罪を犯したからでした。(第二法4・25・27、28・62・66) しかし、ひとたび人びとが預言者の説教(同上4・29・31、30・1・6)に耳を傾けて回心するやいなや、神は、パレスチナ以外の地に離散していた民を集めて、祖国に戻らせてくださいました。

廃虚から再建されたエルサレムの神殿は、この再一致を祝う特典をもつ場でありました。(エゼキエル37・21、26・28とマカバイ①1・27・29、2・18) この神殿の中で新約のメンバーになった改宗者たちも、同じ神を礼拝します。またエルサレムは、「神なる夫」、つまりヤーヴェが「城壁の内に集めた(イザヤ49・21、60・1・9と詩篇87とトビア13・11) 13) 無数の子供たち「全員の母」となりました。実に城壁は、神殿と、神礼拝のため神殿に集う人々をふくむ胎に似ています。キリストが成就なさった贖いの光のもとに、旧約時代から備えられていたこのテーマを、とくに福音史家聖ヨハネが扱っています。

聖母マリア

教会一致の絆

イエズスこそ、離散した神の子らをご死にによって一つに集める御方です。(ヨハネ11・51・52) 現代では、襲われ、追い散らされた(同上10・12) 悪魔の犠牲者である人々はすべて「離散者」であるとと言えます。しかし、離散してはいても、キリストとのおこぼれを聞き入れるなら、「神の子」と(同上1・12とヨハネ①5・1)になることができます。キリストは離散した民を、もう一つの神殿、言い換えれば、御父を示し、ご自分との完全な一致を実現して下さる御方、のうちに集めてくださるのです。(ヨハネ10・30、17・21) 「ほんもののエルサレム」は、弟子の群れ、つまり教会から成り、イエズスはその教会の中へ、ユダヤ人も異教徒も招き入れてくださいます。(同上10・16、11・51・52、12・32・33) マリアはこの新しいエルサレムの母であります。「集められたあなたの子供たちを「ごらん」と、預言者はいにしえのエルサレムに語りかけています。(イザヤ60・4(七〇人訳) 十字架上から愛する弟子に(ヨハネ19・26)御母をお託しになったとき、イエズスは「婦人よ、これがあなたの子です」(同上)とおっしゃいました。そしてこの弟子は、あらゆる時代の主の弟子全員を代表しています。

神の御母であり、私たちの母でもあらせられる聖母マリアに、「諸国の全家族が幸いにも(…)平和と一致のうちに一つの民として集められて、至聖にして不可分の三位一体の神に栄光を帰す」ことのできるよう祈りましょう。(『教会憲章』69(八・七))

説教・講話・書簡等の抄訳

観想修道女のみなさんへ

キリストの神秘体のうちにあつて つねにすぐれた役割を果たしている

教会のなかで観想生活は栄ある地位を占めて来ましたが、今後もそうあり続けることでしょう。修道院内で、祈りと沈黙、礼拝とつぐないに没頭するみなさん、みなさんの命はキリストと共に神の内に隠れています。(コロサイ3・3) この奉獻の生活は、洗礼のときに受けた賜の延長にあり、その賜に礎をもつと言えます。「神は世の創造以前から、キリストにおいて私たちを選び、愛によって、ご自分のみ前に聖であるもの、汚れないものとなるよう望まれた。(エフエソ4・1) この同じ神は、洗礼の秘跡において私たちを罪から解き放ち、キリストとその教会に導き入れ、「私たちが新しい命に歩」を進めるよう討らってくださいました。(ローマ6・41)

徹底的にキリストに従おうというみなさんの生活はこの新しい命のみのであります。それは、貞潔、従順、清貧、つまり、観想生活の根本を成す生活であります。みなさん方の生命の中心であり存在理由、大聖テレジアの言葉によれば、「すべての宝の中の宝」(『自叙伝』21・5)、これこそキリストにほかなりません。

修院での生活によって、一層観想的にキリストに従うようになり、ついには修道生活がキリストとひとつになります。「私たちの生命はキリストです」(『靈魂の城』第5の住居 2・4) 大聖テレジアは聖パウロの言葉を使つてこのように述べています。修道女とキリストとのこの一体化こそ奉獻生活の中心であり、観想生活であることをしめす封印であると言えます。

沈黙に包まれ、謙遜で従順な生活を送りつつ、怠りなく花むくことを待つなら、キリストとの純粹でほんものの友情を保つことができまます。「キリストは君主であらせられると言え、友として接することが出来ます」から。(『自叙伝』37・5) 日夜このように主とつきあうこと、これすなわち祈りです。これこそ修道女の従事すべき最も重要な仕事であり、主とひとつになるために通らぬわけにはゆかない道なのです。「愛のはしめのためにおなりなさい。私どもをかかもお愛しくくださった御方に、念禱の道を通つて従おうと決意したみなさん」(『自叙伝』11・1)

みなさんが世間を離れて修道院で送る沈黙の生活は、刷新の原動力であり、キリストの霊がこの世に現存して下さるよう働きかける酵素であると言えます。このようなわけで、先の公会議では次のように教えました。観想修道女は「キリストの神秘体のうちにあつて(…)つねにすぐれた役割を果たしている。これらの人々はすばらしい賛美のいけにえを捧げ、神の民を聖性の豊かな果実で飾り、その模範によって動かし、神秘的な使徒的豊かさによって発展させているからである。(彼女たちは)教会のほまれであり、天上の恩寵のほとばしり出る泉である」(『修道生活の刷新・適応に関する教令』7)

みなさんの生き方が使徒職のゆたかな実りをもたらすのはキリストの恩寵のおかげです。キリストは修道院内で送られるみなさんの奉獻生活を取り上げ、受け入れてくださいます。主はみなさんを選び、ご自分の過ぎ越しの秘

義に一致させてくださいました。その同じ主は世の聖化を計るご自分の仕事にもみなさんを加えてくださるのです。キリストに接ぎ木されたぶどうの樹のように、みなさんは、すばらしくも神秘的な諸聖人の通功(諸聖徒の交わり)をとおして、豊かなみのりを(ヨハネ15・5参照)与えることができます。

これこそ、日々の奉獻生活のよろこびであり、信仰に生きる者にひらける展望です。みなさんの念禱と徹夜の祈り、聖務日禱(教会の祈り)でささげる賛美、僧房で、そして、仕事場での生活、会則による犠牲や自分で課する犠牲、病や苦しみ、これらすべてをキリストの犠牲に一致させるなら、みなさんの生き方には、先にのべたような展望とよろこびが与えられます。キリストによって、キリストと共に、キリストにおいて、みなさんは賛美と世の聖化のためのささげものとなることでしょう。

リジュエールのカルメル会で私は次のように話したことがあります。「この点について寸分の疑いも残らぬよう、教会はあるとき、キリストのみ名において、みなさんの生きそして愛する能力を自分のものにした。修道生活の誓願のことで、そのときの誓いをいくどとなく更新してください。そして、聖人たちの模範にならぬ、日ごと、自己を奉獻し、犠牲としてささげてください。神があなたがたの協力をどのようにご利用になるかについて、余分なせんさくなどせず」(一九八〇・七・二)

この上なく忠実に生きるなら、たとえ修院内にこもる生活をしていても、教会から離れてしまふことも効果的な使徒職ができないはずありません。大聖テレジアの娘たちに、リジュエールのテレジアを思い出させてあげてください。修院の中にながら、各国での福音宣教と宣教師たちにかくも近い存在であったテレジアのことを考えて欲しいのです。リジ

ユエールのテレジアと同じくみなさん方も、教会の中心にあつて愛であります。

みなさんの童貞性は、普遍教会と地方教会のなかで数多くの命の与えなければなりません。修院は数々のキリスト共同体の間にあつて、祈りの共同体であり、他の共同体の支え、力、慰めです。それはまた、聖なる場であり、大勢の人々の休息所ともなります。とくに、消費社会では手に入れることのできない素朴で透明な生活を捜し求める若者すべての休息の場となるのです。

世界は、一般に考えられている以上にみなさんの存在と証言を必要としています。往々にして相対的なねうちのものしか称揚しない世間にあつて、福音という本物かつ絶対的な価値のあるものを、人々に示してやる義務がみなさんにはあります。物質的なもの、一時的なもの、靈魂のよろこびにならぬもの、これらを過大に評価する世界に、神のなもののねうちを教えてやらねばなりません。

みなさんの生活の要約である福音の使信を示せば、先にのべたことは実現できます。それはまた、大聖テレジアのことばにも見られることだからです。「この世の財よ、消え失せよ。……たとえすべてを失つても、神さまだけが充分だから」(『詩』30(一九八一・十一・一))

■観想修道会のみなさん、世間を離れて修道院で送る沈黙の生活は、刷新の原動力であります。

■世界は、一般に考えられている以上にみなさんを必要としています。

不変の教え

「私たちの平和」であるキリストは、「十字架によって、一つの体のうちに、私たちを神と和解させてくださいました」(エフエソ②4:16)。(…)

愛するみなさん、キリストは神と私たちとの和解を実現させてくださいました。この和解の意味を深く理解できるのは、マリアの光を受けるときです。イエズスの御母は私たち一人ひとりを愛してください、その愛を通して、私たちは御父の温情と優しさに気づきます。そればかりか、和解が人間同志の間に深いかわりのあることをも知るので、教会の御母マリアは一致の母です。子供たちの一致を強めたり、相互の一致を促したりすることなら、とにかく実現させんと、聖母は全力を尽くしてください。

キリストの贖いのみわざがもたらすみのりを考えてみれば、二つの和解、つまり、神との和解と人間同志の和解との間には深いつながりのあることがよくわかります。

人間が神と和解するならば、それはすなわち、人間同志の和解が実現したことになります。

聖書に啓示されているように、罪を犯すと人間は神から離れ、挙句のはてには人間同志の分裂を生じます。神に敵対したり、神と袂を分かたりすれば、人は仲間からも離れてしまうのです。バベルの塔の場面を読むと、このような墮落のさまが眼前に浮かび強烈な印象をうけます。天まで届けと塔を建て、神に比肩しうる力を得ようと目論んだとたん、悲惨なことに、同じ言葉を話していた人々はそれぞれ勝手な言葉でしゃべり始め、意志の疎通ができなくなり、分裂してしまいました。神の主権を拒んだがために、社会の相互関係にも取り返しのできない分裂が生じてしまったのです。

それとは反対に、神と和解する罪人は、隣人とも和解したい、という強い望みをもって聖パウロはこの点を力説して

います。二つに分かれていたユダヤ人と異邦人は、神と和解して、キリストにおいて一つの体、一人の新しい人となりました。人類分裂の原因となる憎悪を、キリストはみずから犠牲にして、自分の体において、滅ぼしてくださいました。こうして、すべての人は等しく、一つの霊のうちに御父のもとに近づくことができるようになり、人と人とを分ける壁は取り除かれ、人々の間に平和がもたらされました。まさに、キリストは「私たちの平和」です。

和解の意義

聖パウロはみずからの体験により、和解がすべての人に及ぶものであることを知っていました。回心するまで、ユダヤ教の教えを守

神との和解

人間同志の和解

らない人には敵意を抱いていましたが、心がキリストに向かっただけで驚くべき変化をみせ、異邦人の使徒にまでなったのです。そのとき以来、和解がもつ普遍性にはいかなる障害をも認めませんでした。ユダヤ教を奉じている間、キリスト教徒迫害の無慈悲な旗手でありましたが、のちにキリスト教信仰を広めるにあたっては、以前と変わらぬ熱意と、尽きることを知らない寛い心で、信仰を広げました。聖パウロのあの言葉を思い出して強い印象をうけない人はいないでしょう。「もう、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由民もなく、男も女もない。みなキリスト・イエズスにおいて一つだからである」(ガラツィア3・28)。たしかに人間はそれぞれ異なる存在ですが、このちがいが分裂の原因になるこ

とはありえない、と聖パウロは言いたいのです。なぜなら、キリストが御みずからの体においてすべてを一つになさったのですから。この聖パウロの言葉はイエズスの教えを正確に表わしたものです。この点をたしかめたいのなら、聖ヨハネが記す「イエズスの司祭的祈り」という重要な箇所を思い起こせば充分でしょう。御父と御子が一つであるように、みな一つになるように。(ヨハネ17・21、22) イエズスは、このように願う祈りで、一致の完全な模範を示されました。キリストの犠牲によって人類にもたらされた和解は、ただ分裂をなくし、平和を取りもどすだけのものではありません。神のペルソナ間の一致を人間同志に移すという、高い段階での一致確立を目指しています。従って、和解といっても、失われていた一致を回復するのみならず、それを超えて神のペルソナ間の交わり、つまり、完璧

な一致にあずかるところまで人間同志の一致を高めることなのです。聖書は聖霊の御力がすべての和解の土台となることを強調していますが、それにはちゃんと理由があります。御父と御子の愛からであるペルソナ、つまり聖霊こそ、一致実現の働き手であり、その一致の基盤・模範となるのが神のペルソナ間の一致なのである。

真の祈りの条件

主は、争いのあるところには急いで和解をもたらせと、弟子たちの注意を幾度となく喚起なさいましたが、当然と言えば当然でしょう。神さまをおよるこぼせできる祈りをするにはどうしても和解の決心が必要になります。祭壇に供え物を捧げる前に、まず兄弟のこ

ろに行って和解しなければなりません。(マテオ5・23、24)。どんなに攻撃されても、何度攻撃を受けても、和解の努力をやめてはいけません。人を赦すことに限界はなく、主がペトロにお答えになったように、「七度までではなく七度の七十倍まで」(マテオ18・22) 赦さなければならぬのです。

「あなたたちは敵を愛し、自分を憎む人に善を行ない、自分を呪う人々を祝福し、自分をざんげんする人のために祈れ」(ルカ6・27) 心の底からすぐに和解せよ、とイエズスはお教えになります。相手の敵対する態度を見ることがきり、和解などとてもじゃないが無理だと思えるときでも、キリスト信者はまことの愛の心で努力を続けなければなりません。心の和解、善意をもとにした一人ひとりの和解を実現させねばならないのです。

キリストは和解の難しさをよくご存知です。困難をのり越えるのに必要な力はすべて、キリストが御みずからの犠牲によって獲得してくださいました。ですから、神と和解することができる人なら、隣人と和解することなどできないとは言えないはずで、互いの心を閉ざす柵は十字架によって取り払われたのですから。

現代世界に目をやれば和解の必要なことがよくわかります。争いが、個人、家族、社会、国家、国際間など、あらゆる分野をまきこんでいるからです。社会の一致を築くためにキリストの犠牲がなかったとしたら、このような争いをなくすことはとうてい不可能でしょう。しかし、救い主はすべての人を、一致と和解に向かえ、とあと押ししてください。聖霊を通して、ご自分の愛で人々をさらに強く一致させてくださるのです。

この世界で働く神の御力に対して、信仰をあらたにし、人類に平和が訪れ、平和にともなう喜びが広がるよう、努力する決心をしましょう。(一九八三・五・十八)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しながら
そのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
替振郵便 神戸 3-72393